

理事長コメント（参加型システム研究所・理事会で）

2009年12月

- ・今回のオバマ大統領のアジア歴訪は中国がメインで、日韓訪問はついたりであることが明らかだった。オバマは東京演説で、米国が太平洋国家であること、ひき続きアジアに関与していくことを強調したが、これは 21 世紀がアジアの世紀であり、アジア経済とのつながりなしには米国経済も成り立たないことを確認したものである。あわせて、日本が提唱している「東アジア共同体」が米国抜きで進められることを牽制する狙いを持っていた。
- ・オバマは、政権交代による政策見直しは当然としながらも、米軍基地問題では前政権との合意事項の履行を求め、沖縄県民、日本国民を失望させた。鳩山首相の「対等な日米関係」の要求についても「日米関係はすでに対等だ」との考えを示したが、戦後 60 年余も米軍を駐留させ、駐留費の 75% も負担させながら、どこが対等なのか。
- ・訪中したオバマは、首脳会談を通して 21 世紀を「米中（G2）主導の時代」にしようとしたが、中国は同調しなかった。温家宝首相はオバマに対し「中国は経済は大きくなっているが、人口も多いのでまだ発展途上国であり、現代化にはなお時間がかかる。また中国は平和外交を進めており、多くの国が共同で世界の問題を決めるべきで、米中主導という考え方はとらない」と述べている。
- ・政権交代後も、守旧派による民主党バッシングが続いており、米国の圧力も加わって鳩山政権の足並みが乱れてきた。なんとしてもこの難局を乗り切って「平成維新」の大業をすすめていかなければならない。